

男性性とケア行動

——東アジア 5 都市の比較から——

お茶の水女子大学 石井 クンツ 昌子

研究背景と目的

アジアの多くの男性にとって稼得役割を意識したヘゲモニックな男性性（多賀 2018）が理想的であると考えられてきた。しかし伊藤（2018）が「メンズクライシス」と指摘するように、男性が経験する長時間労働、過労死、自殺率などの問題が深刻化してきている。同時に、2000 年代になり「育メン」などのケアをする男性が徐々に注目を浴びるようになった（石井クンツ 2013）。

この背景を受けて、本研究の2つの目的は（1）東アジア 5 都市（東京、ソウル、台北、上海、香港）在住男性の心理的側面の類似点と相違点を比較して、これらの男性たちがどの程度、ケア行動（家事、育児）を行っているかを比較することと、（2）東アジア 5 都市に住む男性の家事、育児にどのような要因が関連しているのかを検討することである。

方法とサンプル

データは東アジア 5 都市在住の 20 歳 -69 歳の男性から WEB 調査により 2018 年 6 月に収集された。サンプル数は各都市 1000 名（合計 5000 名）で、主な分析手法は共分散構造分析である。

調査対象者の平均年齢は 41.25 歳（東京）、37.96 歳（ソウル）、37.49 歳（上海）、36.47 歳（香港）、36.23 歳（台北）である。5 都市全てで最も多いのは「4 年制大卒者」であるが、ソウルでは 66.7% で最も多く、逆に台北は 47.6% で一番低かった。一日の平均労働時間が最も長いのはソウルの 8.75 時間で、次いで台北と東京が長く、最も短いのは上海であった。既婚の男性に対して配偶者との年収格差を見たが、東京が 300 万円でもっとも格差が大きかった。

主な結果

ケア行動のひとつである家事に関して、最も頻繁に行っていたのは上海の男性であり、次いで台北、東京、ソウル、香港の男性であった。6 歳以下の末子を持つ男性に育児の頻度を尋ねたところ、台北の男性が最も頻繁に育児を行っていて、一番少ない参加は東京の男性であった。

次に、対象者を「既婚・子どもあり」「既婚・子どもなし」「独身」と分けて、家事・育児頻度とその規定要因を検討した結果、以下が明らかになった。（1）「既婚・子どもあり」：全 5 都市において、職場での女性観が伝統的であるほど、家事頻度が高くなる傾向が見られた。加えて、上海と香港では、男性の性別役割分業観が非伝統的であるほど、家事を多くしていた。（2）「既婚・子どもなし」：東京と台北では、仕事において競争意識が高い男性ほど、家事頻度が高いことがわかった。上海と香港では職場における女性観が伝統的であるほど、家事頻度が高くなっていた。（3）「独身・子どもなし」：職場での競争意識が高いほど、東京、ソウル、台北、香港の男性はより頻繁に家事をしていた。（4）育児参加については「既婚・子どもあり」男性に限定して共分散構造分析を行った結果、末子年齢が低いこと（東京、ソウル、台北）、本人の年齢が低いこと（ソウル、上海）、配偶者の収入が高いこと（台北）、性別役割分業観が平等的であること（上海、香港）が父親の育児頻度を高くしていた。

結論

東アジア 5 都市居住の男性の育児と家事に関して、性別役割分業観や職場での競争意識と女性観などが共通した規定要因であったが、本人や子どもの年齢、配偶者の収入などからの影響については、各都市で少々違っていた。男性性の多様性に関する本研究の示唆をもとに、ケアする男性や男性性の再定義や概念の再検討が引き続き必要である。